

## 研究ノート

## 日韓併合期・日本人は何を考えていたか④

鄭 大均（東京都立大学名誉教授）

## 第三章 幼少期の体験

## 京城の思い出

戦後の日本では、日本統治期の朝鮮での体験をノスタルジックに語ることをタブーとする風習がある。もう少し正確に言うと、タブーとされるのは朝鮮における日本人の親和性や幸福を語るような態度で、朝鮮人との間の親和性を語ることは必ずしもタブーとされない。たとえば1933年に京城で生まれ、12年間半を朝鮮で過ごした本田靖春（ノンフィクション作家、1933～2004）は1972年、韓国を再訪したときの体験を次のように記している。

ソウルの街はかなり変貌していたが、かつての京城の面影を随所に残していた。旧総督府の庁舎はそのまま使われていたし、小学校五年のとき引率されて行って映画『燃ゆる大空』を見た府民会館や、朝鮮銀行、三中井百貨店、明治座なども、名称は変わったが、建物はそっくり残っていた。しかし、どこよりも懐かしかったのは、昔の住まいがあったあたりと小学校の周辺、それに通学路であった。もっとも、「懐かしかった」という表現を用いることにも、問題はあるのだが。

私が京城にいたのは、(略) 中学一年の夏までであったから、ふだんの行動範囲はおのずと限られていた。したがって、記憶の中の「京城全図」は空白だらけで、あまり面的な広がりを持たない。しっかり刻まれているのは、いくつかの点と点を結ぶ何本かの線である。もっとも、大方の日本人は、点に拠って生活していた。それが日本人街である。

私が住んでいたのは西四軒町といい、電車通りをはさんだ東四軒町と対のかたちになっていた。どちらが先にできたのか知らないが、町名が表しているように、当初はごく少ない戸数しかなかったのであろう。敗戦時で、西四軒町のそれは百戸前後ではなかったかと思う。

この狭い区域から一步離れると、私たちは無意識のうちに毛孔を引き締めた。朝鮮のこどもたちに喧嘩を売られる恐れが、つねにつきまどっていたからである。植民地支配は国家レベルのことで、こどもたちの世界は、朝鮮人の天下であった。私たちはいつも怯えていなければならなかった。

日本人街以外の区域を、私たちは朝鮮人街と呼んでいた。元々、朝鮮は朝鮮人のものであるのだから、朝鮮人というのはおかしい。論より証拠、日本に日本人街はないではないか。

そこで、日本人街を除いた地域を、かりに「面」と呼ぶことにしよう。朝鮮には地方行政の一単位に面というのがあるが、それと区別するために括弧付きで「面」とする。前で用いた「点」ないしは「線」と対照的な意味合いを持たせてのことである。

「面」に入っていくと、こちらより年少のこどもが悪罵を浴びせたり、小石を投げつけたり、唾を吐きかけたりしてくる。つまり、挑発を仕掛けるのである。相手を甘く見て小突きでもしようものなら、物陰にひそんでいたそれより年かさの子が飛び出して来て、「お前はなぜ小さい子を殴ったか」と、こちらの胸倉をつかんでののしりはじめる。逃げれば深追いはしないが、言い返すと喧嘩は避けられない。

低学年の頃、その手に引っ掛かって、二、三度、殴り合いをした。しかし、その場の喧嘩に勝ったとしても、向こうは「面」を支配しているから、決定的少数派に属している私たちは、いつかはかならずやられる。迂回路をとれば、当面、その危険を避けられるが、どこをどう通ったところで、「面」をよけるわけにはいかないのだから、挑発が待ち受けていることには基本的に変わりがないのである。

したがって、身の安全を図るには、朝鮮人のこどもたちと争うのをやめるしかない。通学路という「線」を、言いがかりをつけられないよう足速に移動するのが習いとなった。

京城時代を通じて私には朝鮮の友人が一人もいなかった、といったら不思議に思われるだろうか。

日本人の数がきわめて少ない地方では、例外的に朝鮮人と一緒に小学校教育が行われていたらしいが、私が直接知る限りにおいて、日本人と朝鮮人とでは、通う小学校がはっきり分けられていた。日本人街に住んでいた日本人だけの小学校に通っていたのでは、朝鮮の友人ができるわけがない。(『私たちのオモニ』新潮社、1992年、30～33頁)

これは日本統治期の日本人街と朝鮮人街の間にある集団力学を教えてくれる文であるが、日本人街を離れたときの体験とは非日常的な体験であって、「懐かしかった」という風景の方が、本当は日常の体験であったはずである。だが本田は、その郷愁を語ることを自らに禁じ、非日常的な風景に議論を展開してみせるのである。似たような例はいくらでもある。五歳のとき千葉県市川市から京城にやってきた安岡章太郎(1920～2013)は、京城の思い出を次のように記している。

芝生の上を風に吹かれて転がって行くお面を追い駆けて行く。これは私がいまだに反復してみる夢の一つである。

あれは何処の庭だろう。築山があって、ツツジの花が咲いていた。公園でもない。よそのお屋敷の庭でもない。わかっているのは、それが京城、いまのソウルの何処かだということだけだ。あの頃、あの街には、誰の持ちものでも公共のものでもないような(略)家が方々あって、そこでは園遊会と称するものが、たびたび行われていたようだ。私の、風に飛ばされたセルロイドのお面を追い駆けて行く夢は、そういう催しに初めて連れられて行ったときの記憶である。当時、私は二年保育の幼稚園の二年生で、父親の転任で千葉県市川市から京城に移ったばかりの頃だった。ときは五月か、六月のはじめ、あの街では色いろの花が一斉に咲きそろう季節であった。

「エー、アサツバラ、アサツバラ……」

朝鮮銀行の前の広場を、朝早く朝鮮人がそんな風に呼びながら通って行く。朝鮮人のチゲ（背負い子）に積み上げた青い植物がアスパラガスだということも、それをどうやって食べるかということも、私は何も知らなかったが、その促音の強い良く透る呼び声だけは、カーンと澄み切った青い空の色と一緒に、いまも私の中にアザヤカに響いてくる。私の住んでいたのはその広場から放射状に分れた通りの一つ、本町という繁華街の裏手にあった黒板塀の囲いの一画で、そこに父の勤務していた憲兵隊の官舎があった。

あたり一帯は、いわば占領期間中の米軍のワシントン・ハイツ、グラント・ハイツ、などと呼ばれた地域に当たるものだったのだろうか、板塀の外側にも日本人の住居や店舗ばかりが集まって建っており、私たちは朝鮮人とは没交渉に暮らしていた。けれども京城おもといえば、私はその「日本人街、のたたずまいさえ、何よりも朝鮮人の物売りの声から憶い出す。官舎の囲いの裏門を出たところに、キラク館という日活系の活動写真館があり、私はそこで尾上松之助の追善記念興行というのや、河部五郎、酒井米子、大河内伝次郎などのカッドウを見物して、剣戟けんげきごっこに熱中したが、そのキラク館のノボリが強い北風に煽られて寒空にはためき出す頃、角の空き地で朝鮮人の焼き栗屋が、「ヤキグリヤ、ヤキグリ、アータカキノ、ヤッキーグリ……」

と、ヤケ糞になって叫んでいた声は、凍てつく京城の晩秋の寒さとともに、まだ私の肌身に沁みとおるように残っている。「温かいの焼き栗」といっているのが、なんだか私には「ああ戦いの焼き栗」といっているように聞こえて、子供ごころに悲愴な感じがした……。実際、あの頃の京城の冬は「ああ戦い」といいたくなるキビシサだった。家の中はオンドルやストーブで温められていたし、外に出る子供の私はべつに寒さをツライとも思ったことはなかったが、よく冷え込んだ翌朝、眼の前の本町の通りで乞食の子供が凍えて死んでいたという話を聞かされると、それは内地には考えられない冬の怖ろしさを感じさせた。

その恐怖感はどうなものか——？ たとえば子供の頃、私は零下二十度近い真冬の本町の舗道に自分と同じ年頃の朝鮮人の子供が、素肌に南京袋みたいなものをまとただけで、イモムシみたいになって寝転がっているのを見ると、憐れみや同情よりも、そのふてぶてしさが端的に怖ろしかった。店舗の前をふさがれると客が寄りつかなくなるので、ときどき店員が出てきて、その子の着ている南京袋を掴んでズルズルと他の場所へ引き摺ずって行く。子供はまるで死んだようにグッタリとされるままになっているが、店員がひっこむとたんに立ち上って、また同じ店の前へ行って半裸の体をゴロリと横たえる。そんな動作が、たしかに生きものとして慄然となるようなものを、子供の私に感じさせた。舗道には同じような乞食の子供は他にも何人かいたが、他の子は凍死するのか、しばらくたつといなくなって別の子供が入れ替わるのに、いま言ったその子だけは頑として、毎日、同じ店先のいつもの場所で、南京袋の破れ目から泥だらけの腕や大腿を突き出したまま、たぶん夜通し寝転んでいるのだ。私は、そういう朝鮮人の子供が他にも大勢いて、寄り集まっては自分たちの知らない地下でモグラモチみたいに体を寝そべらせながら、せっせとメチャクチャに大きな穴を掘りつづけているような気がして、気味悪かった。

ところで、もしかすると日本人の自分が朝鮮人にキラわれているんじゃないか、と薄うすでも感じて怖ろしかったことが一ぺんだけある——。それは小学校二年のときだが、京城大学の病院でヘントウ腺をとれといわれて手術することになった。手術台の椅子に座らされて待っていると、診察してくれた先生とは別の、つまり朝鮮人の医者がやって来て、いきなり私の口を開けさせると大きな鉤<sup>かぎ</sup>みたいなもの突っこもうとした。思わず口を結んで顔を横に外らすと、その医者は眉間にタテじわをよせたまま、黙って私の顔を眼鏡の奥からジッと見詰めた。その神経質そうな医者<sup>かぎ</sup>の顔に浮かんだ何ともいえない嫌悪の表情が、ふと日本人にはない冷酷なものとして感じられ、おとなしくしていないと何をされるかわからないぞ、という<sup>こわ</sup>怕<sup>おそ</sup>さで最後まで静かに我慢しつづけた。

この医者が、なぜそんなに不機嫌だったのか、その理由はいま考えてもわからない。しかし、その医者が私の前に現れたときたぶん私は、なァんだ朝鮮人か、という表情をあらわに顔に出したのかも知れない。そしてそれが相手の態度を硬化させたのかも知れない。何かそういうトゲトゲしい異民族との神経の触れ合いのようなものが、子供ながらに感じられて、普通のお医者さん以上に怖ろしかったことだけはたしかだ。

しかし、そういう朝鮮人に対する不信や恐怖は、いつもはもっとトリトメもなく漠然としたかたちで、わけもなく私を脅かしていた。それは一瞬ギクリとさせられるだけで、あとになると何でもないようなことだから、直ぐに忘れてしまうけれども、実際はそういう空気中のチリのような恐怖が、いつも私を取り囲んでいたに違いない。（「ああ戦いの焼き栗…」『文藝春秋』1971年新年特別号）

本田靖春も安岡章太郎も、京城時代の思い出として語るのは、日本人と朝鮮人との間にある不幸の物語である。どちらも良質のエッセイであり、書かれていることに違和感を抱くものは少ないだろう。しかし本田や安岡には、本当はもっとノスタルジックに少年時代を追憶したい気持ちがあったのかもしれない。事実、二人はノスタルジックに文を始めているというのに、急に見えざる神の手に操作されるが如くそれにブレーキをかけ、日本人と朝鮮人との間にある緊張関係を語り始めるのである。

二人とも良い作品を残したジャーナリストや作家であるが、こうしてみると彼らも戦後日本の政治的規範に随分従順であったのだな、と思う。では、このとき彼らを操作したのはだれなのか。それは日本の朝鮮史学に「悔い改めを説く精神運動」（松本厚治『韓国「反日主義」の起源』）を始めた梶村秀樹のような左翼のシンパたちであり、ジャーナリストや作家でいうなら藤島宇内や宮田浩人や林えいだいといった模範生たちがいて、本田靖春や安岡章太郎も結構それに調子を合せて、幼少期を回想しているのである。

### 五木寛之の体験

では、周囲に日本人が誰も住んでいない地域に住んでいたものは、その体験をどのように記すのだろうか。1932年、福岡県で生まれた五木寛之は生後間もなく、父母が小学校教師をしていた朝鮮に渡り、忠清南道の論山でしばらく暮らした後、駐在所の巡査夫婦と五木の家族以外に日本人がだれもない寒村で暮らすという体験をする。父はこの頃、朝鮮人子弟の通う普通学校の校長であったというが、五木は次のように記している。



もちろん、周りに一緒に遊べる日本人の子どもなどもない。その代わりに、地元の子どもたちがよく遊びにきました。彼らは、私がつけている漫画の本を見せてほしい、とせがむわけです。それで、少し優越感をもって見せてやったりする。

いまなら、さしずめテレビゲームを一人だけもっているようなものでしょう。次第に彼らと仲良くなって、一緒に近くの池に魚釣りに行ったり、村のお祭りに顔を出したりしました。遊び相手は、同年配の朝鮮人の子どもたちだったのです。

そういうとき、私が使うのは日本語だけです。一方、彼らのほうは日本語をほとんど使わない。日本語を強制されてはいても、日本人がほとんど誰もいないのですから、当然、彼ら同士はいつも朝鮮語で話しているわけです。

しかし、一緒に遊んでいるうちに、私のほうも朝鮮語を片言で少しはおぼえますし、向こうも日本語を教えられているので、片言の日本語はわかります。コミュニケーションにはさほど問題はなかったような気がします。

(略) ある老人の姿が記憶に焼きついています。夏、朝鮮松の赤い松林がずっとつづく街道があって、その白いほこりが立つ道端の日陰に、一人の老人がしゃがみこんでいる。朝鮮の白い着物を着て、帽子をかぶって、長い煙管きせるを持っているものです。

その老人の目の前には、古文書のような本が広げられていました。左右が五十センチもありそうな大きな本です。その本の上のほうには絵が描いてあり、下のほうには文書が書いてありました。(略)

その本のページを煙管でめくりながら、その老人は辻講釈師のように、うたうような口ぶりで物語を語っていくのです。たぶん、古い朝鮮の物語だったのでしょうか。『春香伝しゅんかうでん』とかそういうものかもしれません。

老人が語っている前には、村のおじさんやおばさんたち、あるいは子どもも五、六人しゃがみこんでいる。犬も一緒に坐りこんでいる。みんなが日陰に坐って、その老人のゆったりした絵解きというか、物語を聴いているわけです。

そうしていると、途中で物売りの人もやってくる。「チゲ」と呼ばれていた背負子しょいこのようなものの上に石油缶をのせて、冷たい水を張って、そのなかに豆腐をいれてある。

老人の語りを聴いている人たちは、その豆腐売りと呼びとめて、水で冷えた豆腐を買う。その冷たい豆腐をてのひらにのせて、端っこからかじっていく。そうしながら、またその老人の話を熱心に聴く。

そんなふうに牧歌的な光景が、いまでも強く印象に残っています。おそらく日本で人気があった紙芝居みたいなものだったのでしょうか。

物語の山場にくると、老人がその情景をいきいきと声で描きだす。そのたびに、お客さんたちは笑い声を立て、身を乗りだし、いったい次はどうなる、というふうにのぞきこんだりする。子どもも大人も、男も女も、みんながため息をついたり、おーっと手を打ったりしながら老人の物語に引き込まれている。

そして、最後に悪人がやっつけられると、みんなで、やったやった、と喜んだりするわけです。物語の名前はもう忘れてしまいましたが、あれは、たしかにその村での印象的な出来事でした。

老人の話を聴きながら、子どもながらにああいう仕事はいいな、おもしろいだろかな、と感じたことを記憶しています。

ひょっとすると、私の「物語」への欲求、あるいは「物語る」という欲求が芽ばえたのは、あのときだったのかもしれませんが。（『運命の足音』幻冬舎文庫、2003年、213～216頁）

ここに記されているのは、朝鮮人との間に繰り広げられた親和性の風景で、それを五木は「牧歌的」と言う。冒頭で記したように、朝鮮人との間の親和性を記すのは必ずしもタブーではない。必ずしもというのは、同化主義的な関係はタブーとされるからであるが、五木が記す風景とは、基本的には五木少年の方が朝鮮人の側に同化しているのだから、これは牧歌的といえるのである。しかし小学校に入る頃になると、五木の家族は京城に引っ越し、五木少年もその地で日本人の小学校に通うようになる。そうすると、そこには日本人の友達との間の「牧歌的」体験があったに違いないが、そのことについての記述はない。五木には『運命の足音』以外の本や発言でも朝鮮体験に触れているが、日本人との間の「牧歌的」体験を語るということはしていないようである。この人も、ポリティカル・コレクトネスには忠実だったのである。

### ネエヤもお嫁さんになるの？

森崎和江（1927年生）は慶尚北道大邱府で生まれ、17年間を大邱、慶州、金泉で暮らした朝鮮生まれの二世である。個人的体験だが、日本側に日本生れの韓国・朝鮮人二世がいるように、朝鮮側に朝鮮生まれの日本人二世がいるということに気がついたのは30代の頃で、それに気がついたら世界中に二世や三世がいるということにも気がついて、視野が広がったような気分になった。

朝鮮生まれ二世といたら、先の本田靖春がそうであり、村上元三、後藤明生、梶山季之、大藪春彦、村松武司、山村美沙、佐木隆三のような作家もそうであるが、森崎和江ほど執拗に、朝鮮で生まれたことの郷愁を、悔恨とともに書き続けた作家はいない。悔い改めを前提にすれば、郷愁も語りやすいということなのだろうが、注意して見ると、語られているのはいつも、政治的に正しい朝鮮人と日本人との関係とその変奏ばかりで、興味深い話は滅多に出て来ない。やや興味深いものに、父が朝鮮人中学生の通う高等普通学校の教員であった、大邱の時代の思い出がある。

坂を登ると広い台地になっていて、奥へ向かって垣根をめぐらした家々が並んでいた。木立が多く、物音がしない。それは陸軍の将校官舎だった。この官舎の丘の端に、三軒だけすこしモダンな造りの民間の住宅があった。それぞれ専用の細い通路を置いて並ぶ三軒の家の裏手は空地で、その一番奥の家にわたしたちは引っ越した。弟がうまれてから間もないころのように思う。

わたしの家と陸軍官舎のあいだの通路は奥へ伸びていた。軍服を着た将校が、当番兵に馬を引かせて朝夕通る。坂の下の陸軍購買所から毎朝注文をとりに来る。三軒の民間の家にも来てくれた。市街から菓子屋、本屋、レコード店が注文の品をとどけに来る。時に、富山の菓売りがやって来て、四角の紙ふうせんをくれる。松葉をどっさり束ねて頭に乘せて、オモニがストーブの焚きつけはいらんかとやってくる。あとは子ど

もが三輪車を走らせた。が、その子らも数多くはない。みなそれぞれ自宅の庭で遊んでいた。(略)

ある日、お手伝いの娘が「和ちゃん早く早く、来てごらん」と呼んだ。家を駆け出して二人で走った。

「お嫁さんよ」

坂を駆け降りた。人びとが走って行く方へ走った。

もう大勢の人が集まっていた。五色ののぼりがひらひらしている。彼女が人をかきわけてわたしを前に押し出してくれた。金色の冠をかぶった花嫁さんが赤いちいさな御殿のようなかごに乗っていた。五色の縞のチョゴリを着て赤い扇を胸元で開いてじっとしている。沢山のオモニたちもそのまわりにいたが、わたしは花嫁さんの頭できらきらとゆれている冠ばかり見ていた。庭にも家の中の広い板の間にも、果物や料理が膳にのって並んでいた。

見物人は門のところにつめかけている。日頃閉めてある門が、この日開いたのだ。

「あのお嫁さん、朝鮮サラム？」

「そうよ。日本のお嫁さんもあんなにするの？」

「わからない」

式が始まって見物人は追い返された。人垣を抜けて戻る時、生きた鶏が両脚をくくられてお膳にのっかっていたのを、ちらと見た。

「ネエヤもお嫁さんになるの？」

「そうよ」

わたしたちはしばらくのあいだ興奮していた。彼女はやわらかな黒い布のチマを胸高に着て、れんぎょうの花のように黄色いチョゴリをその黒いひらひらするスカートの上半身に着ていた。ものごしがやさしい。わたしはその背にもたれて、背骨の上に垂らしている三つ組に編んだ髪にさわる。髪の前には赤いリボンが編みこんでいる。

「このリボン、テンギっていうのよ」

テンギは父のネクタイより長い。

時に彼女は話をしてくれた。

天に昇る虎の話があった。胸がつぶれそうに悲しい話だった。虎をあわれんで涙を拭きつつ聞いた。かなしみの跡がくぼんだまま心に残っている。

わたしたちは母が夕食の支度をしている時、弟を抱いた彼女と、いつもわたしについてくる妹と、四人で遊ぶ。坂を降りて、上と下の陸軍官舎のあいだの広い道を渡り、池のほとりに行った。弟が草の上を這う。わたしは妹と桑の実を摘んだ。家路を急ぐアブジやオモニが広い道を行き通う。(『慶州は母の呼び声』新潮社、1984年、31～33頁)

本当にこんな会話になるんだろうかと思えるところがなくはないが、それでもこれは印象的な会話である。しかし次のような文になると、朝鮮人への親和性があまりに無垢に描かれていて、つき合いきれないなという思いにさせられる。父が慶州公立中学校校長として転任した、慶州の時代の思い出である。

芬皇寺のすこし先に村があった。日本人の家もあって農業をしていた。わたしの友

だちの家もあり、もうすこし先の村には妹や弟の友だちの家もあった。わたしら家族は、わたしの同級生の松永さん一家と親しくしていた。母は何かと心頼みにして、味噌をついてもらったり、お米をわけていただいたりしていた。小豆や漬物用の白菜や大根も。年の暮れには餅つきも一緒にしていただく。松永さんのおじさんお婆さんともにざっくばらんな人で、出入りの朝鮮人も多いし、村の人びとともたいへん親しい。餅つきの日は大勢の人だった。わたしたちは藁小屋の藁に登って遊びながら、餅つきを眺めた。つきたてをみんなで大根おろしで食べた。(略)

父が朝鮮人の家庭に招かれてめずらしい土産を持ち帰る。その料理がおいしい。中でも餡色をした餅米の蒸し物はほのかな蜂蜜の味と、なつめや松の実がまじった弾力のある歯ざわりでなんとも品のいい食べ物だった。さらさらした小豆のこしあんを重ねた白い餅も、お祝い物のようだ。ある夜は正客の父のために山羊をほふって宴があったと、月夜の道を機嫌よく帰って来た。冬のキムチは二つ割にした白菜の葉のあいだに、山海の珍味がはさんである。栗、梨、柿、白身の刺身、えび、塩辛、海草その他が大根や人参などを千切りにしたものとともに白菜につめられ、唐辛子とにんにくで漬けてある。庖丁で切って皿に盛るとオレンジ色となった白菜のあいだから、きっちりつつめてある品々がのぞいた。(略)母はどこで聞いてくるのか、骨つき牛肉を葱やごまなどを入れたたれにつけて炭火で焼いて、大皿に盛り、よろこぶわたしたちにカルビーよと言って食べさせた。

町はずれの生活の必需費は、毎朝電話でご用聞きが入り、配達される。子どもらは月刊雑誌をしきりに催促した。市へ行くオモニが立ち寄ってあわびやうにを売る。甘浦から山を越えて来るのか、まだ潮を吹く。卵売りも来る。野菜、薪売りも。母はそれら行商のオモニから買った卵でよくケーキを焼いた。松永さん宅に持って行けと言ったり、手伝いに通って来るオモニの坊やに渡していらっしゃいと、運ばせた。通学するポプラ並木沿いの畠に西瓜や瓜が実り、見張り小屋が高々と建ってアブジが朝も夜も見守る。朝影の長い頃買った西瓜は冷えていた。わたしは女学校の受験勉強で学校に居残りをする。帰りが薄暗くなる頃、遠く南山のあたりで青く一列に狐火が点滅するのを見た。新羅のくになのだから、どこかの古墳で燐が燃えるのだろうか、青い火の列を眺めながら歩いた。(133~136頁)

### 田中明が見たこと、考えたこと

幼少期の朝鮮での思い出を戦後に記した日本人の回想記の断片をいくつかを記したが、率直にいて、それは多くの場合イデオロギー的演繹という性格を持つものであって、共感しにくい。

とはいえ、例外がないわけではない。朝鮮研究者の田中明(1926~2010)が1978年に行った講演は読んで有益であり、面白い。田中明といっても知る人は少ないだろうが、ここでは日韓国交正常化以後の日韓関係を、「つねに『逃げ』の姿勢でその場その場をしのいで行こうとする日本と、そうした日本を逃すまいと襟首をつかんで『要求』し『糾弾』する韓国」と形容し(「一日本人の見た戦後日韓関係」『現代コリア』1992年12月号)、それを「親の仮面をかぶって演じる偽善劇」(田中明『韓国政治を透視する』亜紀書房、1992年)



と形容した人である、と紹介しておこう。田中明は愛知県で生まれているが、1933年2月、ちょうど就学期になる頃、山田という叔父の家の養子に入るために名古屋から京城に移り住み、京城公立三坂尋常小学校に入学する。その頃、日本人や朝鮮人の子供たちとコマ遊びやタコ揚げに興じた思い出を語る部分がある。

子供時代の話が続けますが……。私がソウルに着いたのは冬でしたから、凍った路上で子供たちが朝鮮ゴマを回しているのが、すぐに目につきました。日本のコマとは、ちょっと違った円錐形の木のコマで、ムチでバシン、バシンとたたいて回します。コマを中心にして、何人もの朝鮮人の子供たちがワァーワァーいいながら遊んでいる。普通の日本ゴマもなかったわけではありませんが、手軽に買えるのは朝鮮ゴマの方だったので、私たち日本人の子供もこれでよく遊びました。

他に子供の遊びでは、チェーギというのがあります。私たち日本人は、これをなまっでチョンギとっていましたが。(略)昔の穴あき銅銭を芯に使うんです。この銅銭を薄紙で短冊型に包んで、穴の部分を破って、そこに包んだ紙の端の部分を細く丸めて通します。そして、これをタテに裂くわけです。ちょうど、羽子板遊びの羽根みたいな形のものでできあがる。これをポンポンと、足で蹴りあげて遊ぶんです。連続して何回蹴ることができるかで、勝負を争います。チェーギのブームが、一年に一、二度はかならずあり、子供たちはみんな夢中になってこれをやる。そうしますと、かならず小学校から禁止命令が出ます。材料の銅銭は、現在通用しているものではないのですが、やはりお金を足で蹴るのは不謹慎だということなのでしょう。ともかく、品の悪い遊戯とみなされていたようです。私などでも、だんだんうまくなって、四〇回か五〇回ぐらいは蹴り続けることができるようになった。ただし、蹴り方にもいろいろあって、後ろ側に蹴って前に戻すとか、非常にむずかしい蹴り方がある。日本人の子供も大いに張りきってやったのですが、どうしても朝鮮人の子供にはかないませんでした。

先ほど朝鮮相撲のことに少し触れましたが、私はその正式なものを見ておりません。私たちがふだん、朝鮮相撲と称していたものは、みんなで手を組んで輪をつくる。そして、回りながら相手の足をかっぱらって倒すという遊びでした。倒された子供はつぎつぎと抜けていくので、輪はしだいにせまくなってくる。最後は二人でやるのですが、とにかく相手を倒すには、とことんまで足を使う。そんなわけで、足わざに限っていえば、朝鮮人は非常に強いし、かつうまいというのが子供世界の定評でした。サッカーなんかで、日本人が朝鮮人になかなかないのは、子供の頃からの足わざの錬磨が違うせいかもしれませんね。

それから、遊びではやっぱりタコですね。これも奴<sup>やつ</sup>奴<sup>だこ</sup>なんかではありません。四角い形で糸の張り方は同じなんです、朝鮮ダコの方は真ん中に円い穴があけてあるんです。どういうためなのかは私にはわかりませんが、なかなかよく揚がりました。日本人が多く住むようになってからは、日本ダコも駄菓子屋で売られるようになりましたが、圧倒的に多かったのは朝鮮ダコでしたね。でも、買ってこることは少なくて、たいがいは自分で作ります。私は重心のとり方などタコ作りでおぼえました。タコ遊びは、ただ揚げるだけではなくて、空中戦に勝つのが男の子としての意気地でした。タコとタコの糸をぶつけあい、切りあうわけです。なんとかして相手に勝とうと思い、ずいぶん工夫

をこらしたものです。五〇番線という、わりあい細くて丈夫な糸を買ってくる。これにビードロを引くんです。ビードロというのはガラスのことで、破片を拾ってきて、細かく砕いて粉にする。次に膠をグツグツ煮て、その中に糸を通す。その膠のついた糸に、さっきのガラス粉をくっつけてやる。こうしておく、糸はヤスリのようにになって、敵のタコと闘うときに、向こうの糸を切るができるわけです。ビードロ引きの場合は、グループを構成してとりかかります。小学五、六年か中学一、二年ぐらいの者が、ボスになって指揮をとる。低学年の子供たちは兵隊で、糸のくり出し役、膠つけ役、ガラス粉のつけ役、糸の巻き取り役と、流れ作業の分担が決められ、一直線に並んで作業につく。ボスは進行状態を見て、「お前の方、もっと早くやれ!」といった命令を下す。まあ、一生懸命ワイワイがんばった記憶があります。私は小学二、三年の頃までやりました。こうしたときには、日本人の子供も朝鮮人の子供も、一緒に協力してやったように覚えています。このビードロ・グループは、タコ揚げシーズン中は戦友的団結をしていましたね。

ところで、そのうちに事情が変わってきて、いつとはなしに、私たちは朝鮮人とは遊ばなくなってしまう。おそらく、私が小学校の五年生頃までだったでしょうか、朝鮮人の子供たちと仲良く遊んだのは……。なぜ、そうなったかといいますと、私の家の近所から、朝鮮人の居住者がだんだん立ちのいていったからでした。

私が当時、住んでいた場所は、これはいまでもありますが、孝昌園という広い公園の近くだったのです。その頃ですから、西洋式公園といった体裁のものではなく、小高い丘があって、そこに樹木が植えられ、小道がついている程度のものでしたが……。そこから先は、急に不便な地域になるという、いわば市街地の一番はずれといった場所だったのです。私の家というのは、崖の上に建っていて、その下には朝鮮人の居住地区があり、表通りをへだてた向こう側は、日本人の家と朝鮮人の家とが並んでいた。つまり、そういう両方が混在した地域だったので、私たちは近くの朝鮮人の子供たちと、しょっちゅう一緒に遊ぶことになったわけです。けれども、この地域にも日本人がしだいに進出してくる。そして社会が変わっていき、朝鮮人の生活基盤が失われていった。というより、奪われていったといえましょう。なにがしかの現金を積まれて、日本人に土地や家を売り渡していったのでしょうかね。そこには、さまざまな社会的要因が宿されていたはずですが、子供だった私には、そうした事情は当然のことながらわかりませんでした。気がついてみると、私の家の周辺からは朝鮮人の住民が消え、一緒に遊んでいた朝鮮人の子供たちの姿も、どこかへいなくなってしまう、ということなんです。（『私と朝鮮のあいだ』『常識的朝鮮論のすすめ』朝日新聞社、1981年。226～231頁）

田中明は朝日新聞に勤めるジャーナリストであり、戦後の時代精神に無関心ではないが、日本人と朝鮮人の関係を加害・被害とか差別・被差別と分類して、それに沿って物語を語ることをよしとしない人である。

小学生時代、私が一緒に遊んだ仲間のうちに、非常に思い出ぶかい朝鮮人の李君兄弟がいました。兄貴の方は私より五つ年上で、体格のいいとてもハンサムな少年でした。ケンカはとても強いと聞いていましたが、ふだんはいたっておとなしい、いわゆる

模範少年でした。その弟の方が私らの本当の遊び友だちで、年は向こうが一つか二つか上で、ちょっとガキ大将といったところがありました。日本人に対しては、よく対抗意識を燃やし、「オイ、日本人はケンカ弱いな」なんて挑発してくるわけです。こちらは、弱くなんかないというと、それじゃあやるか、ということになったりする。

ところが、一九三七年に蘆溝橋事件が起こって、日中戦争が始まります。龍山の第二〇師団からも兵隊たちが続々と出征していく。戦況を伝える号外が毎日のように出る。そうした雰囲気だったのですが、弟の朝鮮人少年は、号外や新聞の記事を一つも落とさずに熱心に読むんです。そしてそのたびに、私の名前は当時、養家の山田こいとと書いていたんですが、私を呼びつけて一席ぶつんです。「オイ、山田、本日の鯉登部隊のごときはな、何千の敵をけちらし、一日に何キロの道を進撃したんだぞ……」。鯉登部隊というのは、北京から南下して石家荘に進み、娘子関の激戦を勝ち抜いて、山西省の太原に突入した部隊だだと思いますが、その時分の新聞などで大いに勇猛をとどろかしていた部隊です。李君は、自分が部隊の参謀にでもなったかのように、誇らし気に戦況報告をまくしたてる。こんな調子で、戦争が開始されてから三週間ぐらひは、しょっちゅう彼の勇壮なる戦況報告を聞かされて、私の方がへきえきしてしまいました。と同時に、私には奇妙な気がしました。彼はいつも、日本人はけしからんといった態度をとっていた。そのけしからん同じ日本の軍隊が、いくら勝ちまくっているからといって、お前がそういばらなくてもいいじゃないか。私は自分の疑問を、彼には何も伝えませんでした。しかし、そのときに私が味わった、何かわかるようなわからぬような、チグハグな感じというものは、ずっと私の内にしこりとなって持続されているような気がします。

一方、日本人の少年の方にも、奇妙な心理状態がありました。私が中学一年のときだったと思います。試験がすんだ日のことで、解放感から三、四人の仲間と、ワァーワァーしゃべりながら家に帰る途中のことです。話はいつのまにか、高等小学校のことになっていました。当時の京城には、従来、小学校に付設されていた高等科を一つに集めて、高等小学校の専門学校(?)がつくられていました。この学校には、日本人と朝鮮人が一緒に通学していたんです。日本人の場合ですと、中学校の入学試験にすべった連中が行くのが普通でしたが、朝鮮人の場合は、高等普通学校(日本人の場合の中学にあたる)に行ける人間は非常に数が限られていたはずで、したがって、優秀な生徒がずいぶん高小に行っていたと思います。この専門校が阿峴里にあったので、私たちは多少揶揄的に、そこを阿峴里大学と呼んでいました。その阿峴里大学の話をしているうち、誰かが、あそこで成績のいいのはみんな朝鮮人だそうぞ、といいだしました。その頭のいい連中はみんな反日で、歴史の時間なんかには、日本人はけしからんといって、みんな教師に喰ってかかるんだそうぞ——。私はその話を聞くと、思わず、それはそうだろうな、とあいづちを打ちかけました。と、一瞬早く、側にいた友だちの一人が、それはそうだろうなあ、といったんです。自分が口を切ろうとしたまったく同じ言葉を、横合いから突然にいわれて、私はハッとしました。その友だちは、ふだんそんなことなど考えそうにもないタイプだったので、よけい私にはショックでした。ああ、あいつも、そう思っているのかと。

いまから考えると、日本人のコロン[植民者]の息子たちが、あのとき、どうして、

頭のいい朝鮮人が反日に走るのは当然だと考えていたのか、いまだに私には明確な説明ができません。しいていえば、朝鮮人を差別してはいかんという大義名分論を、耳にタコができるほど私たちに聞かせていながら、それと反対のことをしている大人たちに対する反抗心からかもしれません。あるいは、自分たちにも浸透している朝鮮蔑視に対して、大義名分の方からチクチク刺されて、後ろめたさがあったからかもしれません。それはともかく、われらコロンの息子たちには、いまもって反日にひかれる癖があるようです。ジャーナリスティックな反日はいやですが。

私はその後、一九四四年の一月に日本へ戻りましたので、解放前後の朝鮮については何も知らないわけです。ところで、いまお話したコロンの息子たちの複雑な感情……、それと関係があるかどうかわかりませんが、戦後、私は海軍から復員してきて郷里の名古屋に帰りました。名古屋には親戚が多くいます。やがて、米軍が進駐してくる。この米軍に対する感じ方が、私と親戚の人たちとの間で、微妙にズレているのに気づきました。私の方が平静でおれないところがある。どうしてだろうと考えていたのですが、一九六五年、解放後の韓国に初めて行って、韓国人といろいろ話しているうち、ハッと気がつきました。ああ、おれは朝鮮で育ったからなんだなと。つまり、朝鮮人は日本人から、いろいろとやられてきた。そのときの腹立ちとか、反抗したい気持ち。さっきいった李君など、それをモロに体で示していたわけですが、そうしたものが、知らずしらずのうちに幼い肌を通して、こちらの身にもしみ通ってきているのではなからうか。うまく説明できないのですが、あの頃の朝鮮人の気持ちが、逆の位相にあったコロンの息子へ投影されて、微妙な相互作用のごときものが働いていたのではないだろうか。そんな気がしています。(同書、233～240頁)

小中学校の十一年を京城で過ごした田中明は1944年1月、海軍経理学校に入学するが、間もなく終戦となり、郷里の名古屋に帰る。再び韓国を訪ねたのは1965年のことで、日韓基本条約が結ばれたときに朝日ジャーナル記者として韓国を訪ねるが、「あの地のどまん中で暮していたにもかかわらず、そこの自然も人間も何一つしっかり見ていなかったことに気づいて狼狽した」と言う。氏は隣国を学ぶために在日一世から朝鮮語を学び、またソウルに留学し、1970年代から2000年代にかけて多作ではなかったが、奥行きのある韓国論や北朝鮮論を記す。『ソウル実感録』『常識的朝鮮論のすすめ』『朝鮮断想』『韓国政治を透視する』といった著書は、隣国を学ぶということが知的行為であるとともに情緒的、道徳的な行為でもあり、そこにはいつも当惑が待ち受けているのですよ、ということを教えてください。

以上、本田靖春、安岡章太郎、五木寛之、森崎和江、田中明という、幼少期を朝鮮で過ごした五人の作品をとり上げてみた。いずれも個人的な作品を残した人といつてよいが、その幼少期体験に定型といえるものはないようである。幼少期の体験といつても、それは居住環境によって朝鮮人との交流の形に違いを生み出すものであり、似たような環境に置かれていても、似たような経験するというわけではないだろうし、似たような経験が同じように回顧されるわけでもない。それでも五人に共通するものがあるとしたら、それは幼少期の朝鮮での体験が、やがて引き揚げ後の彼らに外部の目を与え、その作品を個性的なものにするのに貢献した、ということなのだろうか。



## 売る声、買う声、罵る声

さて、これは順序が逆であるのかもしれないが、幼少期の朝鮮での体験は日本統治期にも記されていたから、それを少しだけ紹介したい。長崎で生まれた新木正之介（1904～98）は、3歳のとき父の仕事の関係で南満洲の旅順に引っ越し、9歳のとき朝鮮の水原に引っ越しに来るが、朝鮮で耳にした「音」の記憶を記している。

私が九つの時、日韓併合後あまり間もない頃だったが、私は母や弟と一緒に、水原で働いていた父の許に行くために船に乗り、仁川に上陸した。

船が港に近づくと、丘の若葉の間から異国のにおいのする洋館の白い壁や赤い屋根が見えて、静かな海は爽やかな五月の朝の陽に光っていた。

胸の内側からゆすぶるような太い汽笛の音がする。やがてエンジンを音は止まり、進行はゆるやかになる。一しきりの騒音と共に錨が下ろされ、スクリューのまきかえす船尾の白い泡波が消えると、船は岸から遥かに離れてとまった。緑の水の中に光の縞が入り交じってゆらゆらと舷側にゆれる。

見る中に六、七艘の小舟が船のまわりに漕ぎよせられる。舟を操る白衣の人達はみんな遅く、ちょん髷<sup>まげ</sup>を結った顔は陽にやけて、何か口々に叫んでいた。それは私が耳にした最初の朝鮮語であった。朝鮮の船乗りのはげしい聲を聞いて私は幼心に遠い国にきたことをしみじみ感じて物悲しかった。

水原の家は藁葺<sup>わらぶき</sup>の朝鮮家屋で、中が僅かに改造してあった。近所隣りに住む人は殆どみんな鮮人である。朝鮮の子供とはすぐにお友達になった。一緒に蜻蛉<sup>かげろう</sup>をつり魚をすくい、独楽を廻したものである。

七月になると雨が降りつづいた藁屋根には雨樋がついていないので、雨だれは水のたまった中庭にそのまま落ちる。水たまりに落ちる雨だれの音は小声で話す女のおしゃべりである。

大きな番傘をさして、郵便出しのお使いなどに路地を通ると、顔の白い十四、五の女の子が、細目にあけたオンドルの窓から、外をじっと眺めていることがあった。又雨にぬれながらチゲを背負った塩鯖<sup>しおさば</sup>売りが、ぬかるみの道を跣足<sup>はだし</sup>でビシャビシャふみながら通って行く。(略)

家の近所はすぐ市場だった。十日目十日目に市がたつ。

市場には柱をたて藁屋根をのせただけの小屋が二百軒余りもあり、普段の日は人の子一人もいなくてひっそりしてただけに、市日の賑わいは大したものだった。秋晴れの日などは、その動揺めきが遠い海の響きのように町中に拡がった。

市場の中でも殊に勇ましいのは米の売場である。筵<sup>むしろ</sup>の上に小山のように積まれた米があちらにもこちらにもあって、その間を売買の人がもみ合い入り乱れ、米を量ってはうつす一斗杓は、元気のいいかけ聲と一緒に回転して、杓の口の金輪はキラリキラリと陽に光る。

粟や干し棗<sup>なつめ</sup>を売る店、海草や魚具の干し物を売る店も出来た。干し物の店には一丈にも及ぶ章魚<sup>たこ</sup>が吊り下げられてあった。

小間物屋は、石鹼に糸類、陶器のボタン、それから赤く塗った半円形の櫛やお粗末な鏡などを店一ぱいに並べる。

臨時に出来た酒幕には、もうもうと立ち上る湯気の中に肥ったおかみさんが半月形の大きな包丁で青く細長い南京瓜を刻み、押しかけたお客さんは、立って食べたり据わって飲んだりする。ソルンタンのにおいや、肉を焼くにおいが流れ出て、そこいら一帯を低く這いまわる。

売る聲、買う聲、罵る聲、そしてその狭い人ごみの通り路を山のように荷物を背負った牛が通る。「チミヨチミヨ」。人を分けて行く牛飼の聲はすきとおっている。

私の好きなのは市場のはずれの通りに箱を並べた飴売りである。箱の中には、粉のついた棒飴、琥珀のようにすきとおった飴、黒ごまのついたねじり飴、赤い干し棗をくっつけ胡麻で味をつけ、甘い中にもヒリリと辛い胡椒飴<sup>こしょうあめ</sup>など。胡椒飴へ平たく箱に延ばしてあって、それを大きな鋏で切って売るのである。飴売りの鳴らす鋏はチョコキンチョコキンといかにも長閑に鳴った。〔「朝鮮の音」『金融組合』1936年11月、98号〕

戦後の政治的イデオロギーに汚染された思い出の後に、こういうエッセイに触れると、気持ちちが和んでくる。仁川で生活を始めた新木正之介はやがて京城高等商業高校を卒業。九州大学に進学し、英文学を学び、母校の京城高等商業高校で教鞭をとり、戦後は学習院大学で教える。新木を学習院大学に迎え入れるために動いた人に、レジナルド・ブライス(1898~1964)がいる。ブライスは俳句を西洋に広めるのに貢献した英国人として、あるいは明仁天皇の皇太子時代の英語教師として知られるが、京城帝大で教鞭をとっていた時期があって、新木と知り合ったのは1932年頃のことである(『回想のブライス』印象社、1984年)。

### 宮城道雄と朝鮮の音

「水の変態」という宮城道雄(1894~1956)による箏曲がある。「盲目の箏曲家」宮城が朝鮮にいる頃に作曲した作品である。朝鮮にいた日本人音楽家といえば、古賀政男(1904~78)も1912年から22年にかけて仁川と京城で暮らしていたが、宮城は1907年から17年にかけて、仁川と京城で暮らした。「水の変態」にまつわる逸話を、宮城は次のように記している。

私が始めて朝鮮に行ったのは、明治四十年で、十四歳の時であった。その動機は、父が朝鮮の田舎で商売をしていたのが、暴徒に襲われて店を閉じてしまわなければならなくなり、従ってそれまで私に送って来た学費も送れなくなって、私を呼びよせたのであった。

私は内地にいた時には、箏<sup>こと</sup>の免状を持っていたので師匠をしていた。昼は弟子に教え、夜は我流で尺八を勉強していた。それで朝鮮に行っても、父が失業していたので、一家は私の働きで生活しなければならなかった。

私はその間にも箏が好きで、勉強することを怠らなかった。朝鮮に住むようになって、誰かよい師匠に就きたいと思っていたが、生憎と自分の教わる先生がなくて、いつ

も自分の弾き尽したもののばかりを、弾いていたので、しまいにはあきてしまった。(略)

私が作曲をしたのは、私の弟が小学読本で「水の変態」というのを教わっていた。私は弟がさらえているのを傍で聴いて、非常に面白く感じたのであった。水が霧となり雲となり、雨となり、雪となり、霰となり、露となり霜となる。それが七首の歌で表されていた。

私は誰も教わる先生がなかったので、弟の読むのを聴いて、何とかして手をつけて見ようと思って、その歌をまず一所懸命に覚えた。

小山田のきりの中道踏みわけて  
ひとく  
 人来と見しはかがしなりけり

明け渡る高嶺の雲にたなびかれ  
ゆみはり  
 光消えゆく弓張の月

けふの雨に萩も尾花もうなだれて  
 うれひ顔なる秋の夕暮れ

更くる夜の軒の雫の絶えゆくは  
 雨もや雪に降りかはらん  
 (略)

これをどうかして曲にしたいものと、日夜この七首の歌が私の頭を離れなかった。これはちょうど私が十六の年であった。(略) いよいよ作曲してみようと思いついた縁りは、このほかに私の住んでいた所は、小学校の直ぐ下にあつて、家の前は広場であった。まちなか 町中とは違って割合に自然の四季の感じを、少年ながらも感じていたことであった。

まず春先になると、色々の鳥が来て囀ったり、秋になると様々の虫が鳴いたりした。その上、雨でも降る時は、家が古かったので、軒の雫が落ちるのが聞こえたりした。一体その頃、朝鮮ではバラック建の家が多くて、屋根はトタンが張ってあるので、雨の時にはそのリズムもはっきり聞こえる。内地ではよくごふうじゅう五風十雨という言葉があるが、朝鮮では冬三寒四温というのがあって、(略) その四温の時に、降り積もった雪が解けてシトシト落ちる雫の音が面白い。まだ年はいかなかったが、それらのことを実感していたので、弟の歌を聞いて作曲する気になったのである。

私が箏曲に西洋音楽を取り入れるようになったのは、レコードのお蔭にもあるけれども、その時分から西洋音楽が好きで、楽友会の龍山軍楽隊の人々と交際をして、可愛がって貰ったり、こちらからも行ったり、また西洋の楽器をいじらせて貰ったりした。音楽会のあるたびごとに、聴きに行ったり、先方でもあることを知らせてくれたりした。そんな風で洋楽に親しみを覚えているうちに、ただ今まで習って来たものばかりでなく、何か新しい曲をものしたいものだと考えた。箏曲には大体昔からきまった型にはまったものが多くて、しかも単調である。それを洋楽のように、音をもっと二重音とか三重音とかいうような複雑なものにして変化に富んだものにしたかった。

その頃、京城の本町通りに日希商会にっきという外国煙草たばこを売っている店があって、いつも独逸から来た新しいレコードをかけていたので、私はよくその店頭で立ち聴きしていた。そんなことをしている間に店の人と知り合いになって、色々と珍しい音楽を聴かされて、箏もあのようによいものにしてみたいものだと思った。私がちょうど十七の年に仁川を引き上げて京城に移ったのである。(宮城道雄『新編 春の海——宮城道雄随筆集』岩波文庫、2002年、219～223頁。初出『雨の念仏』三笠書房、1935年)

14歳のとき朝鮮の地にやってきた盲目の少年は、あるときは鳥の声や虫の音に、あるときは軒の雫しずくが落ちる音に耳を傾ける。非凡な音の感覚の持ち主が、音についての体験を記しているのだから、これはただ事ではないが、「唐砧」というエッセイには、宮城自身が砧の音に引き込まれる場面が出て来るから、こちらも思わず耳をそばたてる。

朝鮮に来て誰も感じるきめたのは砧の音であろう。殊に秋の夕方にあの音を聴くと何とも言えぬ感じがする。どこからともなく砧を打つ音がし始めると、そのうちに、あちらからも、こちらからも聞こえて来る。あるいは早くあるいは緩やかにゆる、流れるように、走るように、聴く人の心をもまた、その調子に引き込まれるのである。

私が仁川から京城に移った頃である。夜になるとよくこの砧の音を聴いて、面白いと思っていた。それからちょっと思いついて作曲する気になったのである。それは西洋楽風に、箏と三味線さんみせんの合奏曲で、四重奏にした。曲の初めは静かな朝鮮の夜、ことに秋の感じを持たせ、漢江のゆるやかな流ながれを思わせるような、気持を取り入れて合奏曲にしたのである。これが箏と三味線の合奏の始めであった。そんな動機から作曲を続けるようになった。

私は少年の頃朝鮮で育ったせい、朝鮮で自然の感じを教えられたような気がする。今でも暇があったら、朝鮮に行って暢のんびりと作曲をしたいと思うけれども、朝鮮も今日ではその頃より開けているから、そんな自然の感じがいかも知れぬ。(同書、223～224頁)

「朝鮮人の音楽的素質」と題するエッセイには、宮城の朝鮮の音との感応的な出会いが記されている。

朝鮮人は割合音楽の素質を持っている。どんな労働者のような者でも、どこかで音楽をしていると立ち止まったり、腰をおろしたりして聴いている。それが、ただ面白いという感じばかりでなく、真面目に聴いているのである。また物売ものうりにしても、その呼び声がよくのびていた。殊に今でも感じているのは、毎日塩を売り歩いてきた老人であるが、私の家では、その塩売の老人を東郷大将と呼んでいた。その老人の声が品がよくて、私はよく聴いていたことがあった。新売まきうりが「ナフサリヨ」といって売り歩く声も暢のんびりと聞える。

私が外出する時に、いつも私の手引きをしていた朝鮮人がいた。二、三年私の家にいる間に、私の弾く曲をすっかり覚えてしまった。もちろん弾けはしなかったが、弾いている曲を聴いて、それが何の曲かということを知っていた。



その後、その男が私の家から暇をとって、他に奉公をした。その家の奥さんが箏をしきりに弾いていたそうである。奥さんの方では、聴いている相手が日本の箏の曲なんかはもちろん、上手下手もわからぬ朝鮮人の下男であると思って、少々間違っても遠慮なく弾いていたら、その下男が、「今弾いているのは何々の曲でしょう」といったので、奥さんの方でびっくりして、そのわけを問われたそうである。すると、その男が、自分は弾くことは出来ないけれども、私の家において、箏の曲は聴いて知っているのだと話したら、今度は奥さんが、きまりが悪くなって、以後は遠慮して弾くようになったと、私の所に来て話したことがあった。(略)

京城の郊外に牛耳洞という桜の名所がある。(略) 私はもちろん花を見るわけにゆかぬので、郊外散歩のつもりで、牛耳洞に連れて行かれたことがある。ところが、連れの人に勧められて大分酒を飲んだので、酔っぱらっていい気持ちになっていた。ちょうどその時、私たちの休んでいた所から、そんなに遠くない所に、やはり朝鮮人が花見に来ているらしかった。朝鮮の暢んびりとした歌を歌っていた。私はいい気持ちになっていたので、皆の知らぬうちに、その歌のする方に行って、聴き惚れていた。私は朝鮮語の単語を知っていたので、そのうちに、一言二言話しかけたら、朝鮮の方が喜んで、私を仲間に入れてくれた。私は朝鮮の酒を飲まされたり、御馳走をして貰ったり、歌を聞かされたりしたことがあった。

日本人は朝鮮人の歌を、亡国の徴ちゆうがあるというけれども、私は決してそんなことはないと思っている。朝鮮で聴くとなかなか暢んびりしてよいものである。

私は官伎ケイサンの練習所に朝鮮音楽を聴きに行ったことも、交換演奏をやったこともある。拍子なども、朝鮮の方が、三拍子、四拍子など取りまぜてあって、変化が複雑である。

先年、朝鮮から正楽せいがくだん団というのが来たことがあった。それは朝鮮の雅楽あちらを研究している楽団で、私が、故近衛直麿このえなおまろさんに紹介して、日本の雅楽を聴かせたことがあった。その時正楽団の人々のいうには、曲はよいが拍子が朝鮮のから見ると、単調であるように思うが、もっと複雑なものをとったらどうかといったことがある。

朝鮮の音楽は、一いちの笛で長く引張る節をやって、打楽器で三拍子とか、六拍子とかに変化させるものが多い。従って、民謡にしても面白いのがある。思い出したが、今でも不思議でならないのは、朝鮮人には、調子外れの人というのがほとんどないことである。語学なども早く覚えるのも、これらに関係があるのではないかと思う。(同書、224～227頁)

宮城の朝鮮体験には目明きにはできない体験があり、ときには目明きを越える体験がある。この人の朝鮮体験は格別であり、格別な人間関係を持った人でもあるが、それでも彼は人間であり、ハンデを持つ人間でもあった。「伊藤博文公」のエッセイは、そんなことを感じさせてくれる。

私が初めて作曲して、それを発表した時は、まだ、子供ではあったし、またその描写が素人にもわかるので、歓迎されたのであった。その頃京城に楽友会というのがあって、その会の目的は、倭城台に音楽堂を建てるためにやっていた。会員は統監府(その頃総督府をこう呼んでいた)の役人や、龍山の軍楽隊の人々が主おもであった。その会で、

私の事を聞いて、出演を頼まれたり、会員になってくれといわれたりして、共に加わったことがあった。

当時の統監は伊藤公であったが、朝鮮を引き上げて内地に帰られる時、仁川の浅岡という料理屋に私は招かれて、自分の曲を弾いたことがあった。統監はその時、自分は今もう一度朝鮮に来る用があるから、その時には是非私を東京に連れて行ってやるといわれた。私は常々東京へ行って、一勉強したいと思っていたので、この思いがけぬ言葉をきいて、この上もなく嬉しく思っていたが、統監があのようなことになられたので、出来なくなってしまった。(同書、229～230頁)

宮城道雄が実際に東京に移動したのは1917年のことで、朝鮮で知り合っていた尺八家の吉田清風が宮城を招いた。ハルビンで伊藤博文が暗殺されてから、8年が経過していた。

(以下、次号)